

きざずな



夏&冬休みチャレンジ教室

2020年4月発行

- ・利尻富士町学校支援地域本部事業
- ・放課後子ども教室推進事業
- ・夏休み・冬休みチャレンジ教室
- ・利尻富士町P連研究大会
- ・第二十三回親子ふれあい歩こう会
- ・第二十三回
読書感想文コンクール優秀作品
- ・学校運営協議会
- ・編集後記



第23回 親子ふれあい歩こう会

『どさんこアウトメディアプロジェクト』
電子メディアへの接触時間を見直そう

毎月第1・第3日曜日は、
「ノーゲームデー」

第1・第3日曜日は大人も子どもも、ゲームをしないで
「家族の団らん」を大切に「体験活動」「読書活動」に親しみましょう！



ノーゲームデーとは?

北海道子どもの生活習慣づくり実行委員会では、第1・第3日曜日は、大人も子どもも、ゲームをしないで、「家族の団らん」を大切に「体験活動」や「読書活動」に親しむ「ノーゲームデー」に設定しています。



地域で取り組む青少年育成の輪

平成31年度 利尻富士町学校支援地域本部事業

学校の要請により毎年、子どもたちの健やかな成長のために、地域ボランティアの皆さんにご協力いただいています。



※事務局では、新たなボランティアを募集中です。
自分の特技や学んだことをぜひ生かしてみませんか？
たくさんの方のご連絡をお待ちしています。

★平成31年度の派遣内容★

【鷺泊小学校】

- ・1、2年生の朝読書時間への読み聞かせボランティア派遣（4～9月）
- ・新入生下校指導ボランティア派遣
- ・社会科授業指導（2回）
- ・スキー授業への補助者派遣
- ・総合学習授業指導

【鷺泊中学校】

- ・柔道授業への有段者派遣、バドミントン部活動指導
- ・バドミントン大会外部コーチ派遣
- ・卓球部活動指導
- ・スキー授業への補助者派遣

【鬼脇中学校】

- ・バドミントン部活動指導
- ・ダンス授業指導
- ・バドミントン大会外部コーチ派遣



遊び、まなび、ふれあえる場をみんなで 放課後子ども教室推進事業

放課後子ども教室は、放課後や週末、夏休み冬休みなどに、安全・安心な子どもの活動拠点（居場所）を設け、地域みなさんがコーディネーターや協働活動支援員となって、子どもたちに学習機会やスポーツ体験、交流活動などさまざまな機会を提供し運営されています。



平日放課後子ども教室

- 日 程／平成31年4月～令和2年3月（平日）
- 会 場／鷺泊小学校・鬼脇公民館
- 登 録／町内小学生 75名
- 運 営／地域コーディネーター2名、協働活動支援員6名

R・ふじっ子クラブ（週末活動）

- ◆1日ふじっ子教室
- ◆書道教室 14名【指導者：高柴幸穂】
- ◆水泳教室 59名【指導者：柴田 瞳】
- ◆鷺泊バドミントン教室 10名
【指導者：地域経験者】
- ◆鬼脇バドミントン教室 8名
【指導者：立脇竜也】
- ◆鬼脇かるた教室 6名【指導者：愛好会】
- ◆南浜獅子神楽子ども教室 9名
【指導者：保存会】



夏休みチャレンジ教室

八月五日(月)～九日(金) 小中学生 八十三名参加

本事業は、子どもゆめ基金の助成を受け、北海道教育大学旭川校の協力を得て行われ、短期集中講座を実施することにより教員をめざす学生とのふれあい、自然とのふれあいを持ち、学ぶ意欲がある子どもたちに対し、学習機会や様々な体験を提供することをねらいとした事業です。

五日間の活動メニューは、学習支援として夏休みの課題取組、苦手教科克服、大学生考案のスポーツ体験やお楽しみレクです。

工作では、教育委員会が考案したシーグラスランプ作り、その他にも水てっぽう遊び、海水浴とプール遊びをしました。

四日目の夜は恒例のバーベキュー&きもだめし、みんなで花火をした後にはテントに寝泊りするキャンプ体験を実施することができました。

今後も事業の継続に向け、大学や地域との連携をより一層充実するために学生や地域ボランティアの確保に努めるなど、更なる事業の充実を図ってまいりますので、よろしくお願ひします。



National Institution For Youth Education
独立行政法人 **国立青少年教育振興機構**
「子どもゆめ基金助成活動」

冬休みチャレンジ教室

一月七日(火)～十日(金) 小学生 三十四名参加

本事業でも子どもゆめ基金の助成を受け、冬休み期間を利用し、様々な体験活動の機会を設け、他者と通じ合い創造していく力を育てることをねらいとしています。

今回もボランティアとして利尻高校生四名に参加していただきました。

活動内容は今回も木戸内装の木戸勝也さんにお越しいただき、ダンボールを材料として使ったトレジャーボックス(宝箱)と教育委員会によるまが玉つくりをしました。

学習支援では冬休みの課題や苦手教科克服への取組、他にもプール遊びやALETのリー先生によるリー・スポーツで室内アイスホッケーとアメリカンドッチボールの2種類のスポーツ体験をしました。

また、毎年恒例の「校内逃走中」と「ジャンボ雪合戦」を予定していましたが、残念ながら今回は雪不足となっており、雪合戦を実施することができませんでしたが、子どもたちは外でソリや雪遊びをして楽しんでいました。

最終日には全体レクでシッポとりゲームとタグラグビーをして全日程が終了しました。これからも子ども達にたくさん体験や地域住民との触れ合いの場を企画していきたいと思ひます。





第23回 親子ふれあい歩こう会

参加者の声

昨年度はヒグマ騒動により中止となりましたが、今年度は7月21日(日)に無事開催する事ができ、幼児から一般までの105名が参加しました。昼食会場まで2時間ほど歩き、新緑と残雪を眺めながらジンギスカンを堪能し、最後はみんなで記念撮影をしました。



- 楽しかったところは友だちができた事です。つらかった事は石ですべったところです。バーベキューは山の上でしたのでたのしくふれあえました。
《矢田 れいん》
- 島に引越しをして、初めて参加をさせて頂きました。1歳になった息子と一緒に利尻島の自然に触れる事ができ素敵な経験となりました。来年は万年雪を見に行けるといいな！
《伊藤 太博》
- 約9年振りの参加。以前は子を引っ張って歩いてましたが、今回は子(甥達)に気を使わせながらの歩こう会。天気も良く、初参加の子達も喜んでくれ、一緒に楽しんだ歩こう会でした。
《菱田 真奈美》
- 歩き汗を流した後の山で食べるジンギスカンとおにぎりは最高に美味しかったです。今年はお母さんが仕事で参加できませんでしたが、来年は家族3人で参加したいと思います。
《今井 秀明》
- 例年より暑くつかれましたが、おいしいジンギスカンも食べれて楽しかったです。坂がけっこう多くてつかれたけど登りきった後、川で遊んで楽しかったです。
《河越 尊夏・姫花》
- 毎年この『歩こう会』に出てみたいと思いながら、今年やっと参加する事が出来ました。親子で同じ体験をし会話も楽しむことができました。(じゃり道が長く帰り道はつらかった)ありがとうございました。
《高橋 幾深・暖・うた・にこ》

利尻富士町PTA連合会研究大会

10月26日(土)に鷺泊小学校体育館において、開催されました。

講師に参議院議員石川大我氏を迎え、「LGBTをめぐる現状と、保護者・教師に望みたい対応～すべての子どもたちが自己肯定できる環境の保障を」と題して、子育て学習会講演会を行いました。

日本において初めて公職に選出されたオープンゲイの議員である講師の「【普通であること】を押し付け



られ、生き辛さを抱えている人がいます。どんな境遇の人にも向き合う社会——。わたしたちの「違い」が肯定される社会——。そんな社会を実現する。これが、私の使命です。」というお話に、参加者一同深い感銘を受けました。

参加者の声

- LGBTについてカラダの性、好きになる性が印象的で、ココロの性があることを初めて知りました。すごく分かりやすい説明で、とても良かったです。身近にLGBTの人はいないと思っていましたが、実は隠して生活していたかもしれないので、普段から言葉遣いに気を付けていきたいと思いました。
- 情報が多種多様に、また大量にあふれている世の中で「傷つく人がいる」「配慮」というのは年齢関係なく必要で、また、そういう大人に子を育てていかななくてはいけないと強く思いました。また、最近では偏見を持っているのは、子どもより大人の方がいるのでは…とも考えました。



第三十二回

読書感想文コンクール優秀作品

【小学校一学年の部】

「まほうのゆうびんポスト」をよんで

鷺泊小学校 もとじま えいのすけ

ぼくがこのほんをよもうとおもったのは、しまもよのポストがきになったからです。そのしまもよのポストは、てんごくやおぼけにもてがみがとどくまほうのポストでした。

けんとくんは、てんごくにいるおばあちゃんとごんたつていういぬにもてがみを、かきました。どうぶつにもとどけてくれるから、すごいなつとおもいました。

ぼくは、もしにつぼんにまほうのポストがあつたら、きんぎよにてがみをかきたいです。なぜなら、このまえきんぎよがしんでしまつてかなしいからてがみにかきたいです。



【小学校二学年の部】

「イライラくんとこえだちゃん」

利尻小学校 大山 望 叶

わたしがこの本をえらんたりゅうは、イライラということばがきになったからです。

わたしは、ときどきおとうとけんかしたときや、おうちの人のしかられてしまったとき、イライラしてしまいます。

なので、イライラということばがつかわれている、この本をよんでみようと思いました。

この本には、イライラくんとこえだちゃんが出てきます。イライラくんがそばにくると、みんなふきげんになり、こえだちゃんがいると、みんなごきげんになるお話です。

イライラくんは、おにごつこのおにみたいに、つきからつきへとうつつてしまいます。わたしは、この本のように、弟がおこつていと、いつのまにかじぶんにも、

イライラがうつつているなあ、と
思いました。

このお話のさいご、イライラくんは、と中でふきとんでしまいました。

こえだちゃんは、何もしゃべらないし、うごかないけれど、ごきげんにしています。どうしてか、わたしにはわかりませんでした。

イライラは、ずつとつづくものではないのかなあとも思いました。

わたしは、じぶんの心の中に、こえだちゃんにはずつといてほしいけど、イライラくんはこないでほしいです。

でも、ずつといばしよがないのもかわいそうだなあと思いました。

なので、イライラくんも、ときどきならわたしの心の中にきてもいいよと思いました。



【小学校三学年の部】

「すごく大切なもの」

鷺泊小学校 中山 智 晴

ぼくには、弟が二人います。二番目の弟は、まだ小さいのでかわいからやさしくできます。でも、一番目の弟は年が近いからけんかばかりです。

ぼくは、「レンタルロボット」という本を読みました。このお話は、弟がほしかったけん太が、学校の帰り道「ロボットかします」という店を見つけて、おこづかいで弟ロボットを手に入れるお話です。

弟ロボットの名前はツトムです。さい初はかわいかったけれど、かっ手におもちやを使われたり、けん太のお気に入りのお母さんのひざの上をとられたり、だんだん理想の弟ではなくなつていきました。ぼくも、お兄ちゃんだから、ゆずらないといけない時がたくさんあります。おこられるのはいつもぼくです。

ある日、学校の発表でツトムが、お母さんのひざの上がけん太のお気に入りだと話してしまいました。けん太は、友達にからかわれて



はずかしかったのでおこりました。でも、ツトムは、「けん太がおかあさんのひぎの上を弟にゆずってくれるやさしいお兄ちゃんだ、と言いたかっただけ」と言いました。ぼくも弟がいやなことばかりするので、おこってしまいます。言ってはいけない言葉だとわかっていて、つめたいことを言ってしまうこともあります。

けん太とツトムが僕と弟にいてるので、気持ちがよくわかりました。

ぼくが一番心にのこっているところは、ツトムがけん太に書いた手紙です。

けん太は、ツトムのことがもういやになりツトムをお店に返してしまいますが、もう二度と会えないので、こうかいます。さい後に手紙を見つけて、そこには大きな字で「おにいちゃんだいすき」と書かれています。

ぼくは、感動して泣きました。なぜなら、ぼくの弟も、ぼくがどれだけつめたくしても、いっしょに遊びたくてついて来たり、いつでもどんな時でもぼくのことをすきでいてくれることに気づいたからです。

さい後に、この本を読んで、おたがいに思い通りにいかないことも多いけれど、兄弟はいいなということを学びました。これからはとくに、一番目の弟とは、けんかもするかもしれないけど、世界にたった二人しかいないぼくの弟を大切にしていきたいと思います。



【小学校四年生の部】

「二つの花」を読んで

鷺沼小学校 黒川 結風

わたしたちは、せんそうを知りません。テレビで見たり、本で読んだり、大人に話を聞いて想ぞうするしかありません。

この本では、せんそう中、食べ物満足に手に入らなかったり、

毎日てきの飛行機が飛んできてばくだんを落としたり、町のがた々にやかれて、はいになっていく様子が書かれています。

わたしたちがくらす今は、おなかですいたらご飯があるし、おかしやジュースも食べられます。ばくだんなんて落ちてこないし、大切な人がたたくかいに行くこともありません。

わたしたちは、とても幸せだと思います。そして、少しせいたくなのかもしれない。わたしたちは、「一つだけ。」じゃなく、もつともつとほしがります。もつとあげたくても、あげられないお父さんやお母さんの気持ち、何も知らずにおにぎりをほしがるゆみ子の様子が、読んでいてとてもかわいそうだと思います。わたしたちが、なかなか感じられない気持ちだと思いました。

ほかに、おとうさんがせんそうに行かなければならない、もしかしたら、お父さんがせんそうで死んでしまうのかもしれないという、悲しくてつらいおわかれも、今ではありません。

本の中では、お父さんのおわかれから十年すぎた日のことも書

かれています。お肉とお魚を選べるくらい、食べ物があるようです。そして、ゆみ子は、お父さんの顔をおぼえていないようです。きつと、「一つだけ。」と言って、お父さんやお母さんをこまらせたことも、あの日の悲しいおわかれも、おぼえていないのでしょうか。平和にくらせるのは幸せだし、これからもずっと続いてほしいけど、この本に出てくる人たちのような気持ちがたくさんあったこと、まだわたしが知らないせんそうの話、悲しいおわかれがあったことは、平和にくらすわたしたちは、学び続け、伝えていかなければなりません。





【小学校五学年の部】

「小公女」

利尻小学校 中田 理央奈

私は、小公女という本を読みました。選んだ理由は、以前この本を読んだ時にひどいあつかいにたえ、力強く生きるセアラがすごいと思いい、この本を好きになったからです。

このお話の主人公は、裕福な家に生まれたセアラという一人の少女です。セアラは、ロンドンの寄宿学校へ入学します。しばらく幸せに暮らしますが、とつ然の父の死をきっかけに、先生方の接し方が激変し、屋根裏部屋で過ごすことになってしまいます。辛く苦しい生活の中でも、やさしさと気高さを失わず、一生懸命生きる、そんなセアラの物語です。

お父さんが亡くなったことで、屋根裏部屋で貧しい暮らしをすることになったのに、いつまでもプリンセスセアラでいることを忘れず、日々たえているセアラの姿が、とても心に残りました。私だったら絶対に、セアラのように力強く生きていくことは無理だと思います。自分が辛い時に周りの友達に対して、優しく接することのできる

セアラはステキだなと思いました。

また、財産がなくなったとたんに、態度を変え、セアラのことを苦しめた寄宿学校の先生のことをゆるせません。理由は、お金持ちだった時とお金を持っていない時で態度を変えらるというのは、学校の先生として、絶対にだめなことだと思ったからです。私は、お金を持っていないか持っていないかではなく、その人のいい所やがんばっている所を見てほしいです。

この本を読んで大切だと思ったことは、三つあります。一つ目は、人のいい所やがんばっている所を見ることです。私は、寄宿学校の先生方みたいに、お金を持っていないか持っていないかで人のことを判断せず、いい所やがんばっている所をしっかりと見て判断できるようにになりたいです。

二つ目は、優しさと気高さを失わないということです。私もセアラのように、自分が苦しい時でも、力強く生きていきたいです。

三つ目は、最後まであきらめない強い心をもつということです。自分の夢をあきらめず、何事にも勇気をもってちよう戦していこうと思います。

【小学校六学年の部】

「いのちの作文」を読んで

鷺泊小学校 渡 邊 拓 斗

ぼくは、「いのちの作文」というぼくと同じ年頃の瞳ちゃんが病気で闘った実話を読みました。

瞳ちゃんは十二才の時に、とつぜん足がいたくなり病院へ行くと右大たい骨肉腫という骨のがんだということがわかりました。肺にも転移していて、なんと余命半年というきびしい状態でした。瞳ちゃんは自分の病気を受け入れ、闘う覚悟をしたそうです。

瞳ちゃんと同じ年頃のぼくですが、今オスグット病といって左ひざの下、痛みがあります。「何ででぼくだけこんな痛い思いをしなればならないんだ!」と思った事が何度もありました。でもぼくの何倍も瞳ちゃんの方が痛いはずです。

病気と闘う事を決めた瞳ちゃんは、つらい抗がん剤治療などにあえて、小学校を卒業することができました。骨のがんの右足を切断する手術の日、瞳ちゃんは手術をやめる事にしました。自分の足と一緒に生きてきたからです。

ぼくだったら左足をすぐに治したいのに……。

再び、中学生の夏に入院してしまのですが、同じく病気と闘う子どもたちに折り紙や絵をプレゼントしてはげましたりしていました。自分も病気でつらいのに、ぼくだったらできません。

その後、色々な手術を乗り越えて、中学二年になりました。瞳ちゃんは「今生きていることに感謝して、悔いのない人生を送って」という内容の「命を見つめて」という作文を書きました。ぼくの考えですが、それは元氣の人、病気と闘っている人：すべての人へ向けたメッセージだったのかな?と思つています。このメッセージには瞳ちゃんの思いが込められており、十三年と八ヶ月、短い人生だったけど、病気と闘い頑張つて生きぬいた、悔いのない人生だったと思います。

ぼくの祖父もがんで亡くなりました。ぼくが生まれる少し前のことです。のどのがんだだったので、言葉が話せず、その時の思いや伝えたい事は、日記帳に書いてあったそうです。その中には、死ぬことのできようふや、ぼくが生まれて



くるのを楽しみにしている事が書いてあったそうです。それは、祖父の命のメッセーじだったと思います。

祖父に「ぼくは元気に生まれたよ、悔いのないよう強く生きるよ」と伝えたいです。

そして今度、祖父の命のメッセーじがたくさん詰まった日記帳を見てみたいです。



【中学校の部】

「ジャッジメント」を読んで

鷺沼中学校二年 吉田 汐音

大切な人が殺されて、復讐がゆるされるならどうしたいですか。この物語は広報監察官鳥谷文乃視点を中心にくり広げられる、さまざまな人の復讐にあたる苦悩をえがいた作品です。

私がこの本を読みおえて、まず最初に思ったことは、「難しい」です。復讐法は正しいのか、人を幸せにすることができるのかはわかりません。その疑問に言えることは、人それぞれということ。復讐をやりとげたあとに込み上げてくるものがすつきりした、などの過去をふりきれた反応か、罪悪感と喪失感にさいなまれるのか、その違いは基準の「ものさし」が違うことだと思います。幼少期から他人の意見を取りいれて作られていく自分だけの「ものさし」。

形も重さもすべてが同じなものはありません。だからこそ人それぞれ違うのだと私は考えます。

「赦す」ことについて、私はこの本を読んでから考えさせられました。罪を犯した他人を赦し、

大切な人がころされた時、なにもできなかった、もしくはそのきっかけとなってしまった自分を赦すことができれば、復讐法など存在しなかったのではと思うようになりました。ですがこれはすごく難しいのです。皆さんはこんな言葉を知っていますか。「罪を憎んで人を憎まず」。まさにこの言葉がぴったりだと思いませんか。私ももし自分が復讐をするか、法律で裁くか選べといわれたら法律で裁く方を選びたいです。ぜひ加害者には刑務所で自分のしたことを見つめなおしてほしいと思える人になりたいです。

私が生きているこの世界にはいろんな人がいて、いろんな事情を抱えている人がいます。殺したくないのに殺すしか方法がなかった人だつてきつといるはず。だからといって罪を軽くしろとはいいません。ですが考え改められる意思があるなら皆が復讐法を選ぶ人も、そもそも殺人を犯す人だつて減ると思います。死んで罪から逃れさせるのではなく、自分の意志で反省し生きてほしいです。

皆さんは大切な人が殺されてし

まっても、その加害者を「赦す」ことができずか。自分も「赦す」ことができずか。まずは自分から歩みより、お互いを赦し合える世の中になつてほしいです。怒りや憎しみに捕らわれず、たまに後ろを向いて立ちどまってもいいから、前に進んでいきたいです。

この本で私の主観は変わりました。ぜひ皆さんも「赦す」ことについて考えてほしいです。





「ひだまりに花の咲く」

鬼脇中学校一年 富岡 小華

「そんなのわたしにはできない。わたしは人前に立つのも、目立つのも、苦手だから」これは、この物語の主人公である「奏」の言葉です。この言葉を見た時、「私と一緒にだ」と思いました。

私は奏と一緒に、人前に立つことも目立つこともとても苦手です。奏が私と違うのは、小学生のときにみた舞台に憧れているということでした。彼女は友達からのさそいで演劇部へ入部します。そして、脚本を担当する「一維」に三年に一度だけ上演される脚本を音読しているところを偶然聞かれ、「おれをつくる舞台に立ってくれ」とお願いされます。結局奏は舞台に立つことを決意するのです。私は引っ込み思案な奏がみんなの前で演技をすることが自分には真似できないと思いました。人前に立つことが苦手な奏が舞台に立つことを決意した理由、それは二つにしばられると私は思います。

一つ目は、小学生のとき見た舞台に立つ憧れの人のようになりたいたいという強い意志があったからだと

と思います。「だってわたしは、やりたくないと思ったことなんて、一度もなかったから」これは、奏が心の中で思っていた言葉です。私はこの言葉が大好きです。やらないのは、やりたくないからではない。自分にはできないと思っているからだという自分の気持ちに気付かせてくれる言葉だからです。そして二つ目は、仲間からの励ましがあつたからだと思います。奏が舞台に立つことを決意したのは、一維の「お前が今この手を掴まなかつたら、おれはもう諦める。二度と鮎原を無理に誘うことはしねえよ。ただし、掴んでくれるなら、お前の世界を変えてやる」という心に刺さるような言葉があつたから、決意できたのではないでしょう。もちろん一維以外の演劇部のみんなの応援も奏を強くしてくれます大切な存在だったと思います。そして奏は、舞台に立ち、無事、成功させることができました。

私はこの本を読んで、奏の姿を見習いたいと思いました。これから私達にも文化祭があります。私も奏のように、そして気が強くていつでも前向きな憧れの人のよう

に、何事にも挑戦して、自信をもつてみんなの前に立てるようなそんな人を目指したいです。そして、奏を励ました一維のように、誰かの勇気になり、救いになるような言葉をかけられる人になりたいと心からそう思いました。





ホームページ
学校と地域でつくる学びの未来

学校と地域でつくる学びの未来

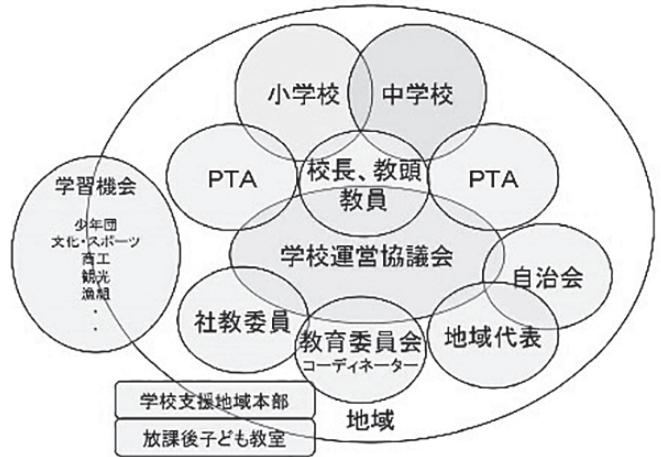


平成30年度より、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）という取り組みが始まっています。これは、地域の住民が学校の運営にこれまで以上にかかわり理解していくことで、学校や子どもたちを応援するものです。道内では、500校を超える学校で導入されています。

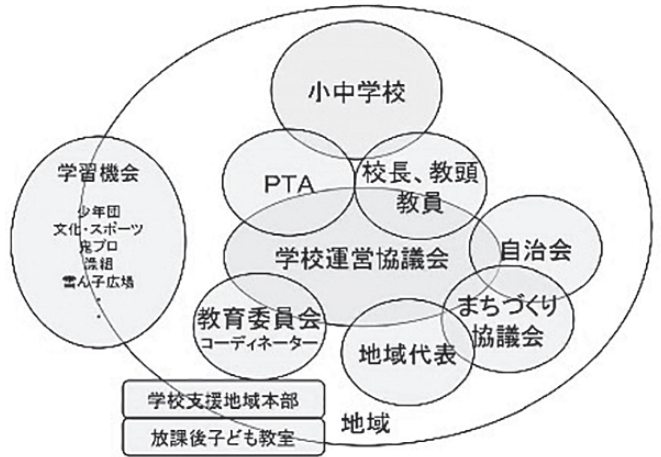
協議会は、鴛泊地区と鬼脇地区それぞれに設置し、メンバーは学校長・教頭、PTA、自治会長、地域住民、社会教育委員、教育委員会10数名で構成され、年3回集まり学校運営の方針や活動、子どもたちにかかわるさまざまな問題（学力や通学路の安全確保など）に対し意見、協議をする場となっています。

本町には、学校支援地域本部という制度があり、学校の要望に応じて地域で技能をもった方々やボランティアを派遣する取組があります（2ページ参照）。そうした取組のより一層の充実を図るためにも、学校の実情や課題などの話し合いの場をもつことで、お互いの情報交換や共有をすることができます。すべては子どもたちにとって大きなメリットを生んでいくことが最大の目的であり、今後も学校と地域をつなぐ場として取り組んでいきます。

学校と地域のかかわり【鴛泊ver】



学校と地域のかかわり【鬼脇ver】



編集
集
後
記